新資料紹介

木内高音宛谷崎潤一郎書簡四十四通（解題・翻刻・注釈）

西野厚志

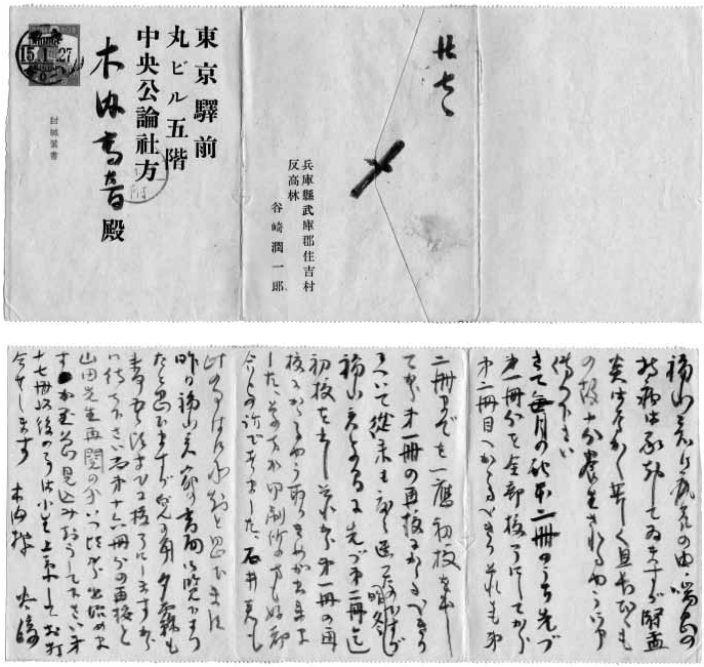
谷崎潤一郎は生涯で三度「源氏物語」の現代語訳に取り組んだが、最初の『潤一郎訳源氏物語』（全二十六巻、一九三九・一～四一・七、中央公論社）は、日中戦争から日米開戦へという時代を背景に執筆されている。国家主義的な傾向が強まるなか、皇統譜の乱脈を主題とする「源氏物語」は舞台上演や国定教科書への収録が問題視され、当時「大不敬の書」（橘純一「源氏物語は大不敬の書である」『国語解釈』一九三八・六）とまで呼ばれた。版元の中央公論社は国粋主義のイデオローグとして知られた国文学者・山田孝雄をアドバイザーに起用することで逆風を凌ごうとしたが、結果的に、皇妃でもある義母と主人公が演じる禁断の恋など物語の核心部分が削除・改変されることとなった（戦後に発表された二度目の訳から完全版となる）。今回紹介するのは、その削除版「谷崎源氏」の編集者・木内高音に宛てた谷崎書簡四十四通である（早稲田大学図書館蔵、請求記号ヌ６９３９９ 1-44）。

木内高音（一八九六～一九五一）は、長野県生まれ、一九二〇年四月より赤い鳥社社員となり、「やんちゃオートバイ」（『赤い鳥』一九二六・十一）など児童文学作品を発表する。その後、一九二九年七月に中央公論社入社、出版部部長、『婦人公論』編集長などを歴任。『綴方教室』（一九三七・八）などを手がけ、石川達三「生きてゐる兵隊」（『中央公論』一九三八・三）の発売禁止処分により退社した雨宮庸蔵の後を継いで『潤一郎訳源氏物語』を担当した。一九四四年七

月に社の解散とともに退社、戦後は『建設列車』（一九四七・九、川流堂書房）などを発表した（写真は『日本児童文学全集』第十一巻（一九五一・一、河出書房）より）。

書簡は毛筆墨書きの封緘葉書四十三通（資料番号1～43、4のみペン）とペン書きの葉書一通（資料番号44）である。封緘葉書はすべて発信地（「兵庫県武庫郡住吉村反高林　谷崎潤一郎」）・受信地（「東京駅前丸ビル五階　中央公論社方」）ともに印刷されており（宛名のみ手書き）、あらかじめ用意された専用の葉書を用いて頻繁にやりとりをしていたことがわかる（資料番号4・12のみ発信地が印鑑、受信地は手書き）。内容は校正や中扉の色指定といった出版の前段階の相談や指示、打ち合わせのためのスケジュール調整など事務的なやりとりが多い。また、度重なる遅延により刊記の発行日に間に合わないケースがあったことも窺える。なかでも、出版の裏側を伝える情報として注目すべきなのは「内務省内閲」（資料番号2）の語であろう。「内閲」とは、事後検閲を基本とする戦前日本の出版警察制度において、非公式に検閲官のチェックをあらかじめ受けるという法外措置として運用されていた事前検閲のことで、紅野謙介『検閲と文学―1920年代の攻防』（二〇〇九・十、河出書房新社）や牧義之『伏字の文化史―検閲・文学・出版』（二〇一四・十二、森話社）などによって近年解明が進められている。その実施期間は一九一七年頃から一九二七年までとされ、その期間外での適用例は、一部の例外を除いて確認されていない。谷崎は「奥書」（第二十六巻）で「各方面からの注意などもあつて、第一稿の当時よりは削除の部分がやゝ増加する結果になつたこと」を断っているが、その実態は明らかでなかった。これまでにも、全集所収書簡、中央公論社社長・嶋中雄作宛（千葉俊二編『増補改訂版 谷崎先生の書簡』二〇〇八・五、中央公論新社）、校閲者・山田孝雄宛／山田宛雨宮庸蔵書簡（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）、雨宮宛（『芦屋

木内高音



市谷崎潤一郎記念館資料集（二）雨宮庸蔵宛谷崎潤一郎書簡』一九九六・十）、雨宮宛山田書簡（細江光「雨宮庸蔵氏所蔵山田孝雄書簡紹介」『芦屋市谷崎潤一郎記念館ニュース』21号、一九九六・十二）、校正係・石井秀平宛（中野和子「谷崎潤一郎 石井秀平宛書簡、谷崎精二 石井秀平宛書簡、石井秀平 雨宮庸蔵宛書簡翻刻」『資料と研究』二〇一五・三、山梨県立文学館）といった関連書簡が確認されている。これら書簡群と今回の新出書簡を時系列に並べた資料体から、削除版「谷崎源氏」を生み出した時代の言論状況が浮かびあがって来るだろう。

以下、日付順に全文を翻刻し、適宜、注釈を加える。なお、先述のとおり、発信地はすべて「兵庫県武庫郡住吉村反高林　谷崎潤一郎」（44のみ葉山）、受信地・宛名はすべて「東京駅前丸ビル五階　中央公論社方　木内高音殿」（一部連名）である。

1　一九四〇（昭和十五）年一月二十七日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．1．27）

福*山君は病気の由喘息の持病は承知してゐますが腎盂炎はなか〳〵苦しく且長びくもの故十分養生されるやう御申伝え下さい

さて毎月の配本二冊のうち先づ第一冊分を全部校了にしてから第二冊目へかゝるべきかそれとも第二冊までを一応初校を出してから第一冊の再校にかゝるべきかについて従来も度〻迷つたのですが昨冬福山君との間に先づ第二冊迄初校を出しそれから第一冊の再校にかゝるやう取りきめが出来ました、その方が印刷所の方も好都合との話でありました、石*井君も此の事は御承知と思ひます

昨日福山君宛の書面御覧下すつたと思ひますが總角夕霧も来月五日頃までに校了にしますからお待ち下さい尚第十六冊分の再校と山*田先生再閲の分いつ頃から出始めますか至急見込み知らして下さい第十七冊以後の事は小生上京してお打合せします　木内様　谷崎

＊　福山秀賢（一八八七～一九八一）……石川県生まれ。一喝社、講談社を経て、一九三〇年五月に中央公論社入社、『婦人公論』編集主任を経て、一九三七年一月に出版部長となり（翌年三月まで）、『潤一郎訳源氏物語』を担当した。一九四〇年六月に退社後、桜書房を創業。戦後はロマンス社、大法輪閣の編集者となった。

＊　石井秀平（一九〇二～四九）……山梨県生まれ。主婦の友社を経て、一九三三年四月に中央公論社入社。一九三七年八月より出版部、翌年三月より新設された校閲部（九月から部長）、一九三八年九月より「源氏物語」発行準備委員となり、『潤一郎訳源氏物語』を担当した。一九四〇年三月に退社。ツルゲーネフ『父と子』（一九四七・二、高山書店）などロシア文学の翻訳も手がけた。

＊　山田孝雄（一八七五～一九五八）……富山県生まれ。「山田文法」と呼ばれる独自の文法論を構築した国語学者、文部省発行『国体の本義』起草にも関ったとされる国粋主義者。日本大学・東北帝国大学教授、神宮皇学館大学長を歴任。『源氏物語之音楽』（一

九三四・七、宝文館）、『日本文法学概論』（一九三六・五、同）など著作多数。『潤一郎訳源氏物語』と『潤一郎新訳源氏物語』（一九五一・五～五四・十二、中央公論社）の校閲者を務めた。

2　一九四〇（昭和十五）年一月二十八日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．1．28）

「夕霧」より「竹河」まで内務省内閲の方はパスしてゐるのでせうか、今度の所は別に忌避に触れさうな文句は沢山ありませんし、二三気がついたところは自発的に削除しましたから心配はないつもりですが一応諒解だけは得ておいて下さい、萬事福山君が心得てゐる筈ですが右一寸ご注意までに

廿八日　谷崎生

木内様

3　一九四〇（昭和十五）年二月一日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．2．1）

広島行を一旦延期して「夕霧」を全部校了にして行かうと思ひましたが遂に出来ず四台だけお送りします、帰宅は一日おくれることになりますからあとは五日迄には間に合はず六日迄になりませう

「御法」再校二台到着、しかし山田先生の再閲が出なければ校了にできませんからそれを一日千秋の思ひで待つてゐます、紀元節過ぎには是非上京の用があるのでそれまでに十六巻全部校了にしたいのです

腎盂炎は大概一度はブリ返すものにて二た月かゝる例が多いやうです、御用心なさいと福山氏へ御伝へ下さい

二月一日　谷崎生

木内様

4　一九四〇（昭和十五）年二月八日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．2．8）

今八日朝までに小生手元へ到着したもの左の如し

山田先生再閲ゲラ――「御法」全部（三五頁）

再校ゲラ――「御法」ヨリ「竹河」ノ中途マデ一四四頁

小生朱筆入リ初校ゲラ（イツモ返却ヲ乞フ分）――「御法」「幻」ノ全部

　即チ「雲隠」以下未着

ところで以上三種のゲラは、かうバラバラでなく、いつも同じ頁の部分を取り揃へて送つて下さる方当方整理上便利であります。此の三種のうち一種類だけ先へ送つて貰つても何等進行の足しにはならないのですから。尚「雲隠」以下「竹河」中途までの初校ゲラさしあたり御返却下さい

八日　　谷崎生

木内様

5　一九四〇（昭和十五）年二月十六日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．2．16）

今夜寝台がなければ明朝特急で立ちますから山田先生のゲラあとはそちらへ保管しておいて下さい

明朝社へ伺はなかつたら月曜の朝参ります

十六日　　谷崎生

木内君

6　一九四〇（昭和十五）年三月七日　木内高音・石井秀平宛〔封緘葉書〕（消印15．3．7）

中央公論四月号のため故左団次の追悼文を十五枚書きました、それで源氏の仕事がおくれ明日からやつと橋姫にかゝります*

右一寸御断りしておきます

七日　谷崎生

木内君

石井君

社長、福山君その後如何ですか

＊「旧友左団次を悼む」（『中央公論』一九四〇・四）

7　一九四〇（昭和十五）年三月十四日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．3．14）

「橋姫」二台だけ初校御送りいたします、再校が出ましたらなるべく早く山田先生へ御送り下さい

石井君のあとを引継いだ人は何と云ふ方ですか校正責任者の姓名をお知らせ下さい、尚此の本独得の文字のつかひ方組み方等委しく石井君よりきいてゐるでせうか、事に依つたら一度その人に小生宅まで来て頂く方よくはないでせうか

社長はすでに出社されましたか、福山君は如何ですか

以上の件、至急御返事被下度願上ます

三月十四日　谷崎生

木内様

8　一九四〇（昭和十五）年三月二十三日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．3．23）

「雲隠」中扉のこといろ〳〵御骨折御苦労に存じます両面すり印刷のこともそれにて結構と存じますたゞ大分おくれて参りますから何卒一日も早く市上（ママ）へ出ますやう祈ります尚愛蔵本*も毎度おくれて困るのですが普及版に引きつゞきおくれずに出るやうに監督願ます

廿三日　谷崎生

木内君

＊　普及版とは用紙や装丁の異なる愛蔵版『潤一郎訳源氏物語』が千部限定で出版された。特製桐箱（蓋裏に「谷崎潤一郎」の自筆署名と「松子童子」の押印）入りで、奥付に普及版にはない「松廼舎源氏」の押印がある。

9　一九四〇（昭和十五）年四月一日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．4．1）

只今別便を以て「総角」二台お送りしました

第十七巻再校はすでに幾らか山田博士の方へ廻つてゐるのでせうか

もう四月になりましたが八回配本はまだでありませうか、いろ〳〵御事情もお察しゝてゐますがこんなにおくれた例がないので心配してゐます、なほいつも市上（ママ）へ出る前に一部だけ早く製本して届けて貰ふことにしてゐますからそのやうにお手配願ます

以上二件に返事お待ち申ます

一日　谷崎生

木内様

10　一九四〇（昭和十五）年四月三日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15. 4. 4）

第*八回配本一部只今到着これで安心、いろ〳〵な骨折御察し申します

まだ中を読んでみませんが「雲隠」中扉の色見本刷の時よりもうすいやうですね

此の上はあとの校正の出るのを待つてゐます

三日　谷崎生

木内君

＊『潤一郎訳源氏物語』第八回配本は第十五巻（「夕霧」）と第十六巻（「御法」「幻」「雲隠」「匂宮」「紅梅」「竹河」）、発行日は三月二十日。

11　一九四〇（昭和十五）年四月九日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15. 4. 9）

第八回配本五部先日正ニ落掌「雲隠」の中扉の色もあれなら理想的の出来栄えにて御苦心は察し申します　但し本文には少〻誤植がありますのでいづれすつかりしるしをつけて御目にかけます

愛蔵本の方はいつになるでせうか、これが毎度おくれて困るのですが一寸御予定御しらせ下さい

本日「総角」のつゞき二台お送りいたします

九日　谷崎生

木内君

12　一九四〇（昭和十五）年四月二十四日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．4．24）

第十六巻の活字の誤りを訂正したものを御参考までに御送りいたしますから小暮君*にも御見せになつて下さい、まだ一通り読んだ（ママ）ゞけですがそれでも十六ケ所発見しました、主として文字の不鮮明なもの、行の終りに来る句読点の脱落が多いのですが、しかし句読点のあるべき所にないのは可なり重大な誤りです、それから六五頁の注意書を特にご覧下さい、なほ見落しは小生にも一半の責任があること勿論です

只今別便で御送りしましたから御覧になつたらなるべく早く御返送願ます

廿四日　谷崎生

木内君

＊　小暮杢太郎（生没年未詳）……一九三二年四月に中央公論社入社、一九三七年八月より出版部、一九四〇年三月より校閲部長（十一月まで）。戦後は天絃社代表を務めた。

13　一九四〇（昭和十五）年四月二十九日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．4．29）

只今「椎本」全部校了にして御送りしましたこれにて第十七冊は小生の方は済んだわけであります

「総角」山田先生再閲の分三十二頁まで来てをりますが、あとをお待ちしてゐます、全部揃つてから校了にしてお返しします

五月十日志賀氏令嬢結婚式参列のため八日か九日頃上京いたします、その前に第十八巻校了にしたいものです

廿九日　　谷崎生

木内様

14　一九四〇（昭和十五）年五月四日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．5．4）

本日「総角」再校三台六四頁まで落掌いたしました、八日の朝汽車で上京の予定でありますから同日以降の郵便物は御差控へ願ひます九日に社へ参上致します

五月四日夕　　谷崎生

木内様

15　一九四〇（昭和十五）年六月十六日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．6．17）

御手紙拝見、

それでは正誤入り源氏十五十六巻速達小包を以て御送りしましたからそれを見て表をお作り被下度、尚此の本は御用済みの上はなるべく至急御返送被成度御願申ます

第九回配本鶴首して居ます、愛蔵本もおくれぬやう願ます

正誤表あまり重要ならざるものは省いては如何、兎に角御作製の上は一度見せて下さい

十六日　　谷崎生

木内様

16　一九四〇（昭和十五）年六月二十六日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．6．26）

「寄生」ゲラ一二六頁頭注「二」

浮舟の方の女房の名

とあるのを

中姫君の方の女房の名

とお改め下されたし

今朝御ハガキ拝見、第九回配本近〻の由お待ち申候*

愛蔵本の件宜敷御手配願度候

本日「東屋」二台お送致候

廿六日

木内君　侍史

谷崎生

＊『潤一郎訳源氏物語』第九回配本は第十七巻（「橋姫」「椎本」）と第十八巻（「総角」「早蕨」）、発行日は六月二十日。

17　一九四〇（昭和十五）年七月二日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．7．2）

昨日東屋初校最後まで御送り致しましたがこれ等第十四回配本分の再校ならびに山田博士再閲の方はいつ頃になりませうか進行状態お知らせ下さい、もはやあと二三回にて完了と云ふ所まで漕ぎつけましたので大いに張り切つてゐます

九回配本もう今日明日に頂けること〻鶴首してゐます

七月二日　谷崎生

木内君

18　一九四〇（昭和十五）年七月十二日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15.7.12）

「寄生」再校ゲラ及び初校ゲラ一七四頁まで全部到着いたしましたが、山田先生再閲の分のみは一四四頁迄で、最後の二台未着となつてをりますから一寸念のため御注意申上げます

尚なるべく此の三種は取り揃へて同時に御送り下さる方整理上便利であります

本日寄生一二八頁まで校了にしてお送り申ます

第九回配本着、あとは愛蔵本を待つてをります

七月十二日　谷崎生

木内君

19　一九四〇（昭和十五）年七月十八日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15.7.17）

前便に紅*葉全集の件に付御返事申上げるのを忘れました

紅葉は明治以後私の一番尊敬する作家であり殊に今度の試みは御遺族のためにも大変によい計画と存じます編輯委員に名を連ねることはむしろ大に光栄として望むところでありますが唯実際に何か仕事をしなければならないのでせうか、それだと目下手一杯なので中さその餘裕がないのです、名儀だけと云ふことに願へれば異議はありません

十七日　谷崎生

木内君

＊　中央公論社版『尾崎紅葉全集』は全十巻の予定で第五巻（一九四二・十二）・第六巻（一九四一・六）・第九巻（一九四二・九）を刊行したが、不要不急かつ時局柄好ましくないとして未完。内容見本には編集委員として幸田露伴、徳田秋聲、菊池寛らとともに谷崎の名がある。

20　一九四〇（昭和十五）年七月二十日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．7．20）

拝啓

福山君の件については本日直接社長宛返事を差上げましたから委しい事は社長におきゝ下さい、要するに社に対する福山君の抗争が予想以上に激化してゐる事を知りましたので小生としてもこれ以上福山君に仕事を頼まない方がよいと云ふ結論に達したわけであります

福山君に代る人を求めるか或は小生自身でやつてしまふか、此の問題は今少し考へてからにします

廿日　　谷崎生

木内君

21　一九四〇（昭和十五）年八月十六日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．8．16）

「蜻蛉」二台お送りします、

第十回配本の刷り上りは何日頃になりますか*

「浮舟」の再校、及山田先生再閲の方の進行状態はどうなつて居りますか御知らせ下さい

当地方は近〻防空演習があり拙宅は隣保の当番にあたつてゐますので忙しくこゝ少時仕事がおくれます

九月上旬泉鏡花先生一周忌にて上京します

八月十六日　　谷崎生

木内様

＊『潤一郎訳源氏物語』第十回配本は第十九巻（「寄生」）と第二十巻（「東屋」）、発行日は九月二十日。

22　一九四〇（昭和十五）年九月三日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．9．3）

小生来る五日夜行にて上京、六日の早朝に社の方へ参りますその節出来れば社長にも御目にかゝり度一寸その旨社長へ御伝言願ひ上げます（お差支あらば又打ち合せてお訪ねします）

松林*さんにも御目にかゝりたいと申しておいて下さい

本日浮舟全部校了にして送りました

三日　　谷崎生

木内君

＊　松林恒（一八八八～一九六六）……東大独法科卒業。中央公論社株式化の法的手続きに携わった関係で一九二五年十一月に入社、経理部長などを経て、一九三六年十二月より専務。一九四四年の中央公論社の自発的廃業（事実上は軍部による解散命令）のあとは清算代表人を務めた。

23　一九四〇（昭和十五）年九月二十九日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．9．29）

昨日お送りした校了ゲラのうち、蜻蛉二〇頁最期の行に

　大蔵大夫△

とありますのを

　大蔵大輔○

と御訂正下さい

右御願ひまで

九月二十九日　谷崎生

木内様

24　一九四〇（昭和十五）年十月十一日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．10．11）

第十回愛蔵本昨日到着いたしましたが六部しかありません、愛蔵本は小生毎回七部づゝ受取ることになつてゐますので係りの方お調べの上至急あと一部御送り頂き度御返事御待ち申ます

十一日　谷崎生

木内様

25　一九四〇（昭和十五）年十月十六日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．10．16）

愛蔵本追加の分たしかに落掌致しました大変御手数をかけてすみませんでした

十月十六日　谷崎生

木内君

26　一九四〇（昭和十五）年十一月十二日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15. 11. 12）

源氏物語和歌講義原稿*三十六枚御送りしました、先づ最初に十頁ほど見本に組んで見て送つて下さい、（組み方は原稿に指定してありますが詳細はそちらで適当に工夫して下さい）

○第十一回配本*はいつ頃になるでせうか

○「手習」「夢浮橋」再校、及び山田先生再閲は進行状態如何ですか

右御返事願ます

十一月十二日　谷崎生

木内君

＊　頭注をなるべく減らしたいという谷崎の意向から、本文中で詠まれた和歌の解釈は「源氏物語和歌講義上・下」（第二十四・二十五巻、第十二・十三回配本）として独立した巻にまとめられた（戦後に出版された『潤一郎新訳源氏物語』からは頭注として記載されている）。当然ながら、本文の削除箇所に含まれる二十七首は未収録である。

＊　『潤一郎訳源氏物語』第十一回配本は第二十一巻（「浮舟」）と第二十二巻（「蜻蛉」）、発行日は十二月十五日。

27　一九四〇（昭和十五）年十一月二十四日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15. 11. 24）

和歌講義原稿七七頁まで御送りしました御落掌の事と存じます

ついてはなるべく早く組み見本を出して頂き度（第一頁より四頁ぐらゐまで組ませてみて下さい）小生来る十日頃には上京しますがその前に一応見ておきたいものと思ひます山田先生御忙しき事とお察し、て居ますが手習浮舟の再校を待つてゐます

尚和歌講義も一応山田先生の校閲を乞ふつもりですからそのつもりでゲラ二通り作つて下さい

十一月廿四日　　谷崎生

木内君

28　一九四〇（昭和十五）年十二月六日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15. 12. 6）

「手習」「夢浮橋」再校及山田先生再閲ゲラ先日正ニ落掌只今三校してをりますから近日校了お送いたします

次に御問合せの件ですが和歌講義以下附録は全部バックなしにいたします又中扉の色紙等も不必要であります但し本扉は本文の通りにします従つて表紙及本扉の題簽は矢張尾上紫舟氏に書いて頂きますがその書き方につきましては小生上京御相談の上決定しますからそれまで御待ち下さい

上京は十三四日の予定ニ付郵便物行違ひにならぬやう御注意下さいしかし十一回配本見本は一日も早く拝見したし

十二月六日朝　　谷崎生

木内君

29　一九四〇（昭和十五）年十二月十三日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印15．12．13）

和歌講義原稿百十四頁まで只今発送いたしました

小生は明十四日「かもめ」で上京、十五日は日曜に付十六日午前中に社の方へ参上いたします社長さんにもその節拝観致度と御伝言願上ます

今度は附録の編輯組み方等には種々御相談申度事もあり又系図等は矢張相*澤君に手伝つて頂度存候間仝君にもその時御目に懸り度候

十三日朝　　谷崎生

木内君

＊　相澤正（一九一二～四四）……山梨県生まれ。土屋文明に師事して『アララギ』に投稿、同発行所へ出入りする。一九三五年八月に中央公論社創立五十周年記念出版『世界文芸大辞典』臨時校正係として委嘱（一九三七年十月まで）。一九三九年六月、正式に中央公論社入社。一九四一年五月に校正班、九月に校正部長、『潤一郎源氏物語』第二十六巻の系図、年立、梗概等の編纂を手がけた。一九四三年四月に応召、八月に中国戦線で戦病死。著書に『相澤正歌集』（一九五四・一、白玉書房）がある。

30　一九四一（昭和十六）年一月八日　木内高音・小暮杢太郎宛〔封緘葉書〕（消印16．1．8）

至急訂正事項ガアリマス

手習八頁頭注イノ全文ヲ左ノ如ク訂正シテ下サイ

イ、此の雨は蜻蛉一二頁に見える雨に当る

マダ間ニ合フト思ヒマスガ、此ノ訂正ハ重要ニツキタトヒ本刷リニカ、ツテヰテモ何トカシテ必ズ訂正シテ下サイ

尚此ノ手紙御覧次第訂正可能ナリヤ否ヤ電報デ御返事下サイ

正月八日　　谷崎生

木内君

31　一九四一（昭和十六）年一月二十四日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16.1.24）

訂正

今朝御送りした原稿のうち第百四十五枚目槿の巻「人知れず」の歌の釈文の中に「槿の君」と書いたのを「槿の宮」と直して下さい

正月廿四日　　谷崎生

木内君

32　一九四一（昭和十六）年一月二十八日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16.1.28）

原稿只今巻十の初めのところ百七十五枚まで御送りしました

和歌講義上巻は巻十の終り行幸までゞ完結とし以下は下巻になりますからもう二三日で第十二回配本の分は脱稿します*

再校ゲラ及び山田先生検閲の分は賢木の中途六四頁まで来たきりあとが途絶えてゐますが、あとは何日頃になりませうか。小生二月四五日頃義妹結婚の用事にて上京暫く（十日程）滞在することになりますのでその前に少しでも餘計校了にしておき度、残りは滞在中に校正をやります。和歌講義は山田先生には一度だけ検閲して頂けば再閲は乞ふ必

要なしと存じます、又三校は責任を負つて下さればそちらに任します
釈文の中のダッシユ――――は三字分の長さに願度、又その上下の字間をあけず、すぐ文字下へつゞけて下さい
正月廿八日　谷崎生
木内君

＊『潤一郎訳源氏物語』第十二回配本は第二十三巻（「手習」「夢浮橋」）と第二十四巻（「源氏物語和歌講義上」）、発行日は四月二十五日。奥付にこれまでなかった「東京府規格外　許可／巳資紙規第一六〇号」の記載がある。

33　一九四一（昭和十六）年二月二日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16. 2. 2）

今日和歌講義初校ゲラ三台返送しましたが矢張最初は再校を自分で見た方宜しきやと存じます
原稿は先日上巻の終り（行幸の終り）まで送りましたが御落掌の事と存じます
あとのゲラ（山田氏の分とも）待つてゐますが（只今手もとに巻五の終一一二頁まであり）小生上京の日決定次第御知らせしますからさうしたら行違ひにならぬやう郵便物御注意願ひます
二月二日　谷崎
木内様

34　一九四一（昭和十六）年二月十七日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16. 2. 17）

拝啓
柚*女史から御聞及びと存じますが中〻シツコイ流感にかゝり半月も臥床昨今漸く起きましたがまだ時〻七度ぐらゐま

で熱が出るので警戒してゐます、ところで先達御問合せした一一三頁以下のゲラと校閲の分いつ頃になりさうですか、此方もそんなわけで大変仕事がおくれましたがそろ〳〵又始めますしそのうち上京もしたいと思ひますので大体の予定承れたら大変好都合なのであります

右御問合せまで

十七日　　谷崎生

木内君

＊　柚登美枝（一九〇三～八四）……大阪生まれ。日本女子大国文科卒。一九四一年一月に中央公論社入社。一九四一年九月より『婦人公論』編集部（一九四四年一月の同誌廃刊まで）、一九四四年七月に社の解散とともに退社、戦後は、創元社を経て、一九五四年に新樹社を設立、限定五〇〇部の署名入り『蓼喰ふ虫』（一九五五・五）を刊行した。

35　一九四一（昭和十六）年二月二十日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16．2．20）

御返事拝見、ゲラは全部（山田氏校閲も共に）一応至急此方へ御送り下さい、上京の前にできればそれだけ早く片づけたいと思ひますから

再校以後は私が見ませうか、そちらで責任を持つてくれますか、どうしませうか、兎に角最初の一二台でも試みに私まで送つてみて貰ひませうか

二月二十日　　谷崎生

木内様

36　一九四一（昭和十六）年四月四日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16．4．4）

和歌講義原稿本日十三巻終りまで御送申尚相澤氏執筆のため引籠中との事でありますが先般御返送しました梗概及び年立の訂正原稿は相澤氏が先を書く時の参考にもと思つて急いでお送りしたのですから至急同氏へ御見せ下さるやう御願申上げます

四月四日　谷崎生

木内様

37　一九四一（昭和十六）年四月二十一日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16．4．21）

和歌講義本日第十九巻の終り百四十二枚迄御送りしましたもうあと僅かになりました

小生は義妹*の結婚式参列のため来る廿六日夜行にて京上（ママ）します、それまでに全部完結して行きたいのですが乍遺憾多少残るかもしれません、但し廿九日に式をすまし三十日夜行にて帰宅しますから五月五日頃までには完了いたします

廿七日午後一寸社へ伺ひます柚さんにもその節お目にかゝりたいと申伝へておいて下さい

第十二回配本待つてゐます

相澤君の原稿全部着御努力を謝すと御伝へ下さい、いづれ直接御礼を申します

四月二十一日夕　潤一郎

木内高音君　侍史

＊　一九四一年四月二十九日の天長節にとり行われた義妹・重子と松平康民の三男・渡邊明との結婚式は、重子が主人公のモデルとなった「細雪」の結末部にあたる。

38　一九四一（昭和十六）年四月二十五日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16．4．25）

拝啓

廿七日に社へ伺ふと申しましたが仝日は日曜であることを発見、依つて廿八日午前中に参上します

右柚女史にも御伝へおき下され度候

廿五日　谷崎生

木内高音君　侍史

39　一九四一（昭和十六）年五月十二日　木内高音・相澤正宛〔封緘葉書〕（消印16．5．12）

先日は祝電有難く存候

和歌講義下巻ゲラ手元にある分は全部校了にして御送りしましたから御落掌の事と存ます

第十二回配本まだ出ないのではどうしたのでせうか、そんな事で十三回が七月中にすむでせうか案ぜられます

小生弟精二の娘が結婚するので十五日朝上京、式に列席の上その夜の夜行で直ちに引き返します、社へ伺つてゐる暇はないと存じますが、午後二時頃一寸電話でゞも御相談したき事ありなるべく御両君とも御在社願度候

十二日　谷崎生

木内君

相澤君

40　一九四一（昭和十六）年五月十九日　木内高音・相澤正宛〔封緘葉書〕（消印16．5．19）

本日梗概全部閲了相澤氏宛返送しました目下年立校閲中です
小生二十一日午後一二時頃社へ参上いたしますからなるべく御両君に御目に懸り度御在社願ひます或は相澤君は山田先生方へ行かれて御留守かとも想像します然る時は小生二十三日まで在京に附その間に帰つて来てほしいと思ひますが如何にや

十九日　　谷崎生
木内君
相澤君

41　一九四一（昭和十六）年六月一日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16．6．1）

只今御送りした奥書原稿四枚目の欄外書き入れのところ、「相澤君が北村久備の「菫草」などを参考に云々」とあるのを、「相澤君が金子本や湖月抄や北村久備の「菫草」などを参考に…」と八字追加訂正して下さい
尚小生は五日のひるの汽車で上京、六日社へ（ママ）に参上します、もし社長も出社してをられるならお目にかゝりたいと申して下さい

一日夕　　谷崎生
木内君

42　一九四一（昭和十六）年七月二十六日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16．7．26）

源氏物語最*終巻五冊本日到着ともかくも間に会ひ同慶に至りに不堪いづれ上京祝盃を挙度存候へ共唯〻社長の病気のみ残念の事に御座候

尚いつも五冊の外に正誤書入れのため別に一部づゝ寄贈を受け居り候間今回も今一部早速御送り被下度乍御手数願上候

乍末筆長〻の御骨折御辛労有難く存候厚く御礼申上候

廿六日夕　　潤一郎

木内様　社長容態其後御知らせ被下度候

＊『潤一郎訳源氏物語』配本最終回は第二十五巻（「源氏物語和歌講義下」）と第二十六巻（「源氏物語系図・年立・梗概・奥書」）、発行日は七月二十五日。奥付に「東京府規格外　許可／巳資紙規第一六〇号」、配給元として「日本出版配給株式会社」とこれまでなかった記載がある。

43　一九四一（昭和十六）年八月八日　木内高音宛〔封緘葉書〕（消印16．8．8）

愛蔵本の最終巻は何日頃になるでせうかこれがすまないと何だかまだ完成した気持ちになりません

社長快方の由大慶これに不過小生は社長との面会が可能になり次第上京の予定であります

八月八日　　潤一郎

木内様

44　一九四一（昭和十六）年八月二十七日　木内高音宛（葉書）（消印16．8．27）

［受信］東京駅前丸ビル五階　中央公論社　木内高音様

［発信］葉山にて谷崎生　廿七日

御手紙有難う秋聲氏の本御入手の由いづれ小生近日、出京可遂候間それまでそちらに預つておいて被下度候

（にしの　あつし　京都精華大学人文学部専任講師）